

ピアノ アドバイザー



長岡 昌子

栃木市出身。

桐朋学園大学演奏学科ピアノ専攻卒業。

三浦浩、三浦捷子の各氏に師事。

ウィーン国立音楽大学夏期講習にて、アレキサンダー・イェンナ氏のレッスンを受ける。

青山タワーホール、こまばエミナース、イイノホール等に於いて、ジョイントリサイタル出演。

大田原、鶴岡で連弾と2台ピアノの演奏会に出演。

佐野、小山、宇都宮ジョイントリサイタルに出演。

調布グリーンホールに於いて、古谷誠一指揮・立川管弦楽団とベートーヴェン・ピアノ協奏曲第4番を演奏して好評を得る。

2000年、足利赤十字病院のチャリティーコンサートを行ったのを機に、院内コンサート、また役所や施設などでの演奏活動を始めて、以後継続している。

2013年アンサンブル・マーノを結成しフルートとの共演による演奏活動を始める。

2017年ピアノユニット“マミーノ”を結成して、サロンコンサートなど演奏の場を広げている。

1975年より、宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科講師。

1. はじめに

「演奏する」ということには、多くの形態があります。私はピアノが専門ですので、ピアノを演奏するということを考えてみます。

ピアノという楽器は、大きくて重いので運ぶことが難しいため、演奏する場所にあるピアノを使うことがほとんどです。

そこでどのようなピアノを使うか、という問題があります。また、演奏する場所の広さや聴衆も様々です。それについて考えてみます。

2. 「ピアノの違い」に対して

まず大きな違いは、グランドピアノか、アップライトピアノか、ということです。

アップライトピアノの場合、タッチやペダリングを変えなければならないということがあります。音量や音色のコントロール、また連打など、諦めなければならないことがいろいろありますので、その範囲で楽しめる曲を、という方向で選曲に注意します。

次にグランドピアノですが、大きさによって弾き方を工夫します。(もちろんピアノは一台一台違いますが・・・)最も私が気をつけているのが、高音と低音のバランスです。多くの場合、大きなピアノは低音が豊かですので、そのことを踏まえて考えるようにしています。またそれに伴って、ペダリングも大切に考えています。



3. 演奏する場所について

様々な場所、場面での演奏がありますが、今日は大きく分けて、「大ホール」と「ワンフロア」の場所で考えてみたいと思います。

まず、大ホールで演奏する場合、特に気をつけていることは、「どこの音を聞こうとしながら弾くか」ということです。普段練習している時とは、音の聞こえ方が違います。私は、ホールの天井のいちばん遠いところから帰ってくる音を聞くように心掛けています。感覚的なことですので、表現が難しいのですが、そうすることによって、客観的な聴き方に近付ける様な気がしています。

次にバランスです。広いホールでは、たくさん差をつけます。音量だけでなく、音色もですが、大ホールには大きくて能力がありますので、それが可能になります。

音の出し方に関しては、大きなピアノは楽器自体が鳴ってくれますので、“楽に”弾く様に心掛けています。その方がむしろよく響きます。

次に、「ワンフロア」の場所での演奏ですが、「大ホール」とのいちばんの違いは、お客様が近くにいらっしゃるということです。大ホールで演奏するより緊張しますが、お客様の反応が伝わり易く、お客様とのコミュニケーションが取り易くなります。また、その様な場所にあるピアノはそれぞれですので、その応力に合わせてのバランスやペダリングも大切にしています。

4. 聴かれる音の違いについて

演奏は、聴く方に心地良さを届けることが大切ですので、どの様な方が聴かれるのかによって注意していることがあります。大きく分けて選曲とテンポです。

年配の方が多い場合は、ゆったりとした曲や高音が少ない曲を、また、年少者が多い場合は、テンポが速い曲やリズムがおもしろい曲などが喜ばれる様です。

共通するのは、“知っている曲”が演奏されると喜んでくださる様です。

5. 日頃の練習で心掛けていること

私が日頃の練習で心掛けていることをいくつか上げてみたいと思います。まず、毎日必ずやっていて効果があると感じていることは、「ハノン」の練

習です。学生の時から毎日さらっていましたが、特にその効果を感じるようになったのは年を重ねてからです。とりわけ脳梗塞で右手が全く動かなくなり、まさにゼロからスタートをした経験により「ハノン」の効果を感じました。一時はピアノを弾くことを諦めかけましたが、「ハノン」によって予想以上の快復が得られ、ピアノを続けられる様になりました。通常のリハビリ以上の効果がありました。



「ハノン」の効果とは、ただ単に指が良く動く、ということのみならず、“音”そのものが良くなります。大きなホールで、たっぷり響く音が出せるようになるのです。それはオーケストラと共演した時に感じました。その様な経験から私は「ハノン」を毎日の日課としていますし、本番近くなると「ハノン」の練習量を増やしています。

次に「運動」です。

ピアノを弾くということは、腕や指だけでなく、身体の多くの部分に関わっていますので、腹筋や背筋、他、何種類かの運動を毎日行っています。これも良い「音」や「持久力」につながっているように感じています。

もう一つは「呼吸」です。

このことは“間”やフレージングに関係して聴く人により解り易く、そして心地よい演奏を届けることにつながると思っています。

吸い方も大事ですが、無意識に行いがちな、吐き方にも心を配りたいものです。ヨガの呼吸法はとても参考になると思います。

～まとめ～

演奏には、いろいろな形態がありますが、全てを支えているのは、「毎日毎日の、基礎を大切にした練習」だと確信しています。